11
2018

The Nara Anesth Times

NEWS LETTER Vol.18

奈良県立医科大学　麻酔科学教室　情報誌
Nara Medical University Department of Anesthesiology
発行所:奈良県立医科大学　麻酔科医局　〒634-8522 奈良県橿原市四条町840
TEL: 0744-29-8902　FAX: 0744-23-9741　HP: http://www.naramed-u.ac.jp/~anes/

麻酔科の過去・現在・未来 －奈良医大麻酔科を中心に－　No.2

奈良県立医科大学附属病院　病院長　**古家　仁**

次回に続いて本学の麻酔科の過去・現在・未来について今回は入局した麻酔科医を中心に書いていく。

初代の教授となられた奥田孝雄先生は、昭和29年（1954年）に本学を卒業し、最初は外科医として歩み出されたが、ちょうどこの年前回述べた恩地裕先生が整形外科の教授に就任され、整形外科を主催する傍らわが国の麻酔の先駆者として本学における麻酔の指導も行われ、各外科系の医師が恩地先生から麻酔の手ほどきを受けた。そういった外科系医師の中で奥田先生はとくに麻酔の理論、その中でも呼吸生理に興味を持たれ、麻酔に深く関わるようになった。

そして昭和36年（1961年）麻酔科助教授に就任され、昭和38年（1963年）恩地先生が第10回日本麻酔学会を開催するときの中心となって活躍された。その後奥田先生は昭和49年（1974年）初代麻酔科教授に就任し、麻酔科学講座を開設された。当時の麻酔科は、医局員もおらず外科系医師が中心になって麻酔を実践していたが、翌昭和50年（1975年）正田、須藤、関川の3名の先生が入局、昭和51年（1976年）には滝田、中島、錦織先生が入局され麻酔科として医局の体をなすような気配が見られた。正田先生には現在も麻酔科に関わっていただいている。ところが、この年麻酔中に笑気（亜酸化窒素）事故が起こり、その対応などで医局員の多くが退局するという事態となった。

しかし、翌年の昭和52年（1977年）味澤先生が、昭和53年（1978年）には開、山下先生が、昭和56年（1981年）には石村、西和田先生が麻酔を志し入局され、徐々に麻酔科として立ち直りの気配が見られたが、まだまだ弱小の診療科であった。開先生は大学の後、県立奈良病院の麻酔科、救急部門を立ち上げ、山下先生は本学のペインクリニックの先駆けとなり、大学の後、済生会奈良病院の麻酔科を立ち上げ、同病院で長年勤務された。味澤先生は、本学で10年近く勤務された後国立奈良病院（現市立奈良病院）の麻酔科を立ち上げ定年まで勤務された。当時国立奈良病院では麻酔科医は味澤先生だけであったため大学からほとんど全員が週に何回か麻酔の手伝いに訪れ厳しい指導を受けたとのことであった。石村先生、西和田先生は天理よろづ相談所病院の麻酔科で勤務され、西和田先生は同病院の部長として、石村先生はその補佐として心臓外科手術の麻酔や新生児の麻酔など当時では大学より進んだ手術の麻酔を多く担当され、また大学からローテートで勤務する麻酔科医を育てるなど奈良医大麻酔科の発展に大きく貢献された。

昭和57年（1982年）が奈良医大麻酔科の大きな転機となった年である。前年の昭和56年に現A病棟が竣工し、心臓血管外科学講座が開設され、新手術室で心臓外科の手術も行われるということで、心臓外科の麻酔をまかせることができる医師が必要ということになり、当時国立循環器病センターの麻酔科で活躍されていた畔先生が新しく麻酔科准教授として就任された。また、昭和57年（1982年）平井先生が大阪大学の麻酔科から戻ってこられ、北口、下村、鈴木、山上先生という今までにない4名の入局者も入り、一度に医局の人数が倍増した。平井先生は畔先生とともに本学の集中治療部を立ち上げ、その後平成記念病院の麻酔科を開設された。北口先生は長年大学で勤務され、私が教授になった後、医局長、准教授として全体のまとめ役、嫌われ役を一手に引き受け、本学の麻酔科の発展に大きく貢献していただいた。下村先生は、本学麻酔科としては初めて大阪府立母子医療センターに研修に行き、平井先生とともに本学小児麻酔の先駆けとなった。鈴木先生は、本学の麻酔科からは初めての国立循環器病センターレジデントとして研修に行き、戻ってきてから大学勤務の後三室病院の麻酔科を開設した。山上先生は、本学のペインクリニックを一躍全国レベ

ルに引き上げた貢献者である。関東逓信病院に研修に行き、戻ってきてから本格的なペインクリニック部門を立ち上げ、神経ブロックではわが国でも有数の実績をあげた。

この年から麻酔科の入局者が増え出し、本学麻酔科が大きく発展していくことになる。次回から詳しく述べていく。

麻酔科と教育

奈良県立医科大学麻酔科学教室　教授　**川口　昌彦**

日頃は医局の運営などにご協力いただきありがとうございます。さて、本年は日本麻酔科学会関西支部の支部長および教育委員会の副委員長として、日本麻酔科学会のいろいろな業務に従事させていただきました。専門医機構の麻酔科専門医制度も開始され、各プログラムでの定員をどうするかが議論されました。特に東京、神奈川、愛知、大阪、福岡の5都市では前年度の定員を超えないような厳重な定員管理がなされました。奈良は、非都市部ということでその影響は少なかったですが。今後、専門医の地域偏在がさらに進まないような方策がとられることが予想されます。2017年以前の学会認定の専門医はプログラム終了後の5年目に、専門医機構のプログラムは4年目に試験をうけるので、2021年には2学年が同時に試験を受けることになります。その混乱を避けるため、筆記試験をCBT試験（Computer-based Testing）に変更したり、実技試験を簡略化し、口頭試験と実技試験を一体化した口頭・実技試験という方向に変わる予定です。また、実技の評価のため、各プログラムの実態を評価するためのサイトビジット研修評価制度も開始されます。これは、客観的に研修プログラムの内容をチェックしようとするもので、各症例数や手技などを実施する機会があるか、サブスペシャリティーの研修を受けているか、カンファランスや勉強会などを適切に開催しているか、形成的な評価を実施しているか、プログラム委員会を開催し議事録を残しているがなどをチェックします。これまで以上に専門医研修の実施体制の強化と見える化をしていく必要があります。

来年度に入局を予定していただける先生が少ないことを受け、専門医研修だけでなく、医学生および初期研修医の教育プログラムも再考しようという取り組みをしています。特に平成32年には初期研修医の先生は1年目に麻酔科を1か月以上研修できなくなるため、短期間で実りのある研修を提供する必要があります。手技の習得を推進するとともに、目標達成の喜びを得ていただくため、麻酔科初期研修手帳も作成しました。同時に麻酔科後期研修医手帳の製作も開始しています。医学生の教育システムも、急性期医療の広い知識を問うPBLDや麻酔科国家試験対策など、心に残る実りある学習機会になれるよう、取り組んでいきたいと考えています。

周術期医療として、周術期特定看護師制度が実施される方向で調整されています。特定看護師はこれまで各施設で育成していましたが、厚生労働省からの依頼で日本麻酔科学会が募集・育成し、各施設で区分実習を実施する方向で検討しています。来年度には募集を開始する予定です。現在の周術期管理チーム認定制度をさらに発展させるもので、周術期管理の体制も今後、大きく変化することが予想されます。多職種で安全で質の高い周術期管理を提供することで、患者アウトカムを改善するという方向に診療報酬もつけられる見込みです。我々麻酔科医は、特定看護師を含め、多職種チームの教育活動にも力を入れていく必要があります。

米国では、スタッフは研究などを担当するacademic track、教育を担当するeducational track、臨床を担当するclinical trackがあります。日本では教育は片手間にという風潮はありましたが、今後は重要な専門として推進していく必要性を強く感じております。目まぐるしく、とても速いスピードで物事が動いていく時代です。皆さんとともに、この波にきちんと乗れるよう、進んでいきたいと思います。今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。

シカゴ留学記

奈良県立医科大学麻酔科学教室　**林　浩伸**

2017年5月から2018年7月までアメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市にあるNorthwestern University Feinberg School of Medicineの麻酔科にvisiting scholarとして在籍し、神経外科麻酔部門の教授Antoun Kohtの下で術中神経モニタリングの勉強をしていました。神経外科麻酔部門って何って感じですが、アメリカでは神経外科麻酔という領域が、心臓麻酔や小児麻酔などと並列に認知されていて、トレーニング受けた神経外科麻酔科医たちが脳外科手術や脊椎手術を専門的に麻酔管理しています。僕は、基本的には開頭術や脊椎手術中に術中神経モニタリング技師と一緒に運動誘発電位（MEP）や体性感覚誘発電位（SEP）などを

モニターしていましたが、他に興味のある手術があればそちらの部屋を見学することも許されていたので覚醒下脳手術や座位手術の麻酔管理も学ぶことができました。また、麻酔看護師のモチベーションの高い仕事ぶりを見ることもでき、パッと見ただけでは麻酔科医との区別ができないほどでした。この病院には、すべての部門を含めると麻酔科医は100人くらいいて、麻酔看護師は50人くらいいるらしいです。麻酔看護師はとても貴重な戦力です。

術中神経モニタリングは、専門トレーニングを受け、資格を有するプロフェッショナルな技師によって実施されていました。術中神経モニタリング技師は、他職種のスタッフ（麻酔科医、神経外科医、看護師、波形判読の神経内科医）と優れたコミュニケーションスキルで情報の共有を行うことで、信頼性の高い術中神経モニタリングを行なっていました。また、麻酔科スタッフだけでなく研修医や神経外科医も術中神経モニタリングに対する知識が豊富で驚きました。毎週金曜朝6時半から神経外科麻酔グループのカンファレンスがあって、麻酔科スタッフが麻酔薬の薬理、脳血流代謝、術中神経モニタリングなどについて講義をするのですが、研修医が積極的に質疑応答して盛り上がっていました。10種類くらいのテーマを1年間で3、4周するので難しい数値も自然と覚えてしまいます。CBF、CPP、ICP、CMRO2の正常値、CBFに影響する因子、すぐ出てきますか？研修医たちはスラスラと答えていました。

実は、視覚誘発電位（VEP）モニタリングの前向き研究をしたくてプロトコール作成や刺激装置の準備をしましたが、最終的に病院の倫理委員会から許可が下りなくて断念しました。それでも、何か論文を書こうとMEPの過去データをまとめましたが、これもあまりうまく行っていません。ですが、うまくいかない時にはなんとかうまくやろうと努力するので、それはそれでイイ経験になりました。臨床で忙しいNorthwesternの彼らが一緒に奮闘してくれたことには感謝しています。

シカゴでの私生活についても書いておきます。シカゴは、ニューヨーク、ロサンゼルスに次ぐアメリカで３番目の大都市で、僕や家族にとってとても過ごしやすい美しくエキサイティングな街でした。レストラン、バー、ミュージアム、建築、公園、アメリカ4大スポーツ（MLB、NFL、NBA、NHL）、音楽なんでも楽しめます。世界都市ランキング（The time out city life index）では、2017年、2018年と2年連続1位に輝くのも納得です。また、多くの映画の舞台にもなっています。映画「トランスフォーマー」では、僕が住んでいたシカゴ川沿いのアパートがぶっ壊されました。著名人もよくシカゴを訪れます。なんと家の前の公園で、テニス界の生ける伝説、ロジャー・フェデラーに超至近距離で会えました。悪童、ニック・キリオスもいて、とても寂しそうにしていたので写真をとってあげました。そして僕は、テニスチームに所属してリーグ戦でプレイしていました。相手がゴリゴリの強いボールを打ち込んでくるのに対して僕はジム通いとプロテイン摂取に精を出して抵抗を試みましたが、非力な日本人ではアメリカ軍の勢いを止めることができませんでした。大砲に対して竹槍で必死に戦いましたが、気持ちでどうにかなるもんじゃなかったです。さらに気候も超ワイルドで、冬期はマイナス20℃になるので川も湖も凍りついて、街はひっそりしてしまいます。そんな中を歩いて、子供達を小学校まで連れて行ってから病院へ通うのは耳や指先が取れそうになるくらい凍えました。冬の間は春が待ち遠しく、春になって氷が解けて間もないうちに公園の芝生の上に寝転ぶビキニのお姉さんが現れ陽気な感じになり、僕の子供達はローラーブレードを履いて小学校に通ってアメリカンライフを満喫していました。気候、人種、食文化、価値観、宗教などの多様性を認め合い、それを楽しむことができたことは、僕と家族、特に子供達にとってもはとても貴重な経験で、のびのび大きく成長できました。是非、皆さんも海外留学のチャンスがあればトライしてください。最後に、このような素晴らしい海外留学の機会を与えていただき感謝しています。

ASA 2017 Boston “トレイン”（“ケツメイシの曲”にのせて）

奈良県立医科大学麻酔科学教室　**寺田　雄紀**

2017年10月下旬にボストンで開催されたASAに参加してきました。海外学会にはいっさいの興味も縁もないまま、いつしか麻酔科医10年目で三十路街道真っ只

中の“三十路ボンバイエ”ですが、紅葉の季節のボストンの街並みを魅力に感じ、食わず嫌いは良くないゾと自分を諭しながら、一度は英語発表してみようと決意しました。恵川先生、井上先生、川口先生の強力なサポートを確かにいただけることが決意を後押ししました。先生方にはこの場を借りて、御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

成田から13時間強のフライトで、現地夕刻にボストン空港に着きました。JAL直行便のおかげでフライト中のストレスは時間ほどありませんでしたが、到着時は脱いでいた靴が浮腫みで履きにくく、はるばるアメリカ東海岸まで来たのだと感じられました。北海道と同じくらいの緯度ということで万全の寒さ対策をして行きましたが、“よる☆かぜ”も適度に気持ちよく、滞在中を通して“太陽”に恵まれました。

PLENARY & FEATURED LECTURESとして取り上げられている講演を中心に参加しました。印象に残っているのはオープニング“ア・セッションプリーズ”です。医療の質、安全性を向上させるための戦略についての講演でした。“はじまりの合図”で演出が華やかで素晴らしいのはもちろんですが、講演者のプレゼンテーションの上手さといったら！リンゴ企業の新製品発表会のような鮮やかさ!!!とても一臨床医が講演しているとは思えません。スライドは補助であり喋りのみで40分以上、全く飽きずに聞かせる圧倒的な力がありました。

これまでの先輩方の留学やASA参加による、長年の国際関係構築のお陰で、ASA初参加の自分でも毎夜何かしらの食事会がありました。ASAでボストンに来ている日本人会では、“侍ジャポン”だからという理由が海外では不思議と強調され、初対面でも日本語を喋る人でさえあれば、無条件に話しやすくなるように思いました。また、代々医局から留学されているカリフォルニア大学サンディエゴ校の先生方からも食事に誘っていただいて、JFKが通い詰めていたという歴史ある素晴らしいレストランで食事をしました。英語の準備を

結局全くせずに来てしまった自分は、ストレスで食が進まないどころか（オイスター（ボストン名物）も実は苦手で）吐いちゃうかも、と覚悟して臨んだのですが、三歳児以下の意思疎通しかできない“三十路ボンバイエ”にも、みんな本当に優しく（もはや、赤ちゃんをあやすように）接してくれて、意外でしたが感想は“幸せをありがとう”でした。そして、海外も含めた広～い“トモダチ”作り、これこそがASA発表参加の意義である、と自分の中で勝手に結論に至りました

肝心の自分の発表は、頼れる三銃士による万全のサポートのお陰でなんとか乗り切ることができました。この参加記が医局のアラウンド三十路の前途有望な先生方の、いつかの初ASAのための“手紙～未来”となれば嬉しく思います。改めまして、医局員および家族のみなさま、一週間の“旅人”を快く認めていただきありがとうございました。

奈良県総合医療センターが新病院に移転しました

奈良県総合医療センター麻酔科部長　**葛本　直哉**

砂利を敷き詰めた職員駐車場に車を止めて、坂道を10分程上っていくとそこに大きな建物が現れます。それが新奈良県総合医療センターです。初めて出来上がった新病院を見たときは奈良県がよくこんな立派な病院を作ったなと感心しました。もともと県が所有していた六条山地区の山林を造成して作られた新病院は総面積12ヘクタールの広大な敷地に地下1階地上7階、延べ床面積68000平方メートル、許可病床数540床の病院となりました。

断らない救急医療の確立、また、周産期医療やがん医療、小児医療などを充実させて大学病院や、他府県のブランド病院に負けない病院にしようと、構想から約10年の歳月をかけて完成しました。

弧を描く形の病棟と長方形の外来棟の組み合わさった構造で、明るい病室は全室南向き各ベッドに窓付きで、外来部門は吹き抜けのある開放的なエントランスにホテルのような受付があります。

今年のゴールデンウィークに旧病院から新病院に引っ越しをしましたが、結構移動距離があるため全職

員早朝から総出で集まり、救急車、介護タクシー、ジャンボタクシーでピストン輸送し、無事半日で終了しました。移動中の急変や、お産などが重ならないかやきもきしましたが幸い何もなくシミュレーションどおりに終了し、なかなかできない経験ができました。

手術室は12室ありますが、当面は10室運用です。もちろんはやりのハイブリッド手術室や、ダヴィンチ用の部屋もあり、広々とした各部屋はコンセントが届かなくて困るぐらいです。各部屋に大型モニター2面と天吊りのモニターが備え付けられており腹腔鏡システムのモニターなどもすべて表示させるとまるで家電量販店状態です。移転を機に乳腺外科、頭頚部外科、歯科口腔外科が増設され、心臓血管外科も本格的に始動し週２ペースで開心術を行っています。

旧病院から引き続いて、積極的に神経ブロックを取り入れた麻酔管理と産科救急疾患の麻酔管理に力を入れており、そこに心臓麻酔も加わり、なかなかマンパワー的にはつらいところもありますが、下村副院長を中心に仲良くやっています。

一度見学がてら応援に来てください。

ペインセンター研修を終えて

聖路加国際病院　麻酔科　**城本　菜那**

大変お世話になっております。入局2年目の城本菜那と申します。この度は、麻酔科専攻医としてペインクリニックで2ヶ月間研修させて頂きました。麻酔科に入局してから、手術室やICUで過ごすことが多かった私にとっては、病棟や外来で患者さんとお話するという時間がとても新鮮でした。身体的、精神的、社会的な痛みを抱えた患者さんの言葉は一つ一つとても重みがあり、考えさせられることもたくさんありました。こうした患者さんの痛みの声をしっかりと受け止め、信頼関係を築いておられるペインクリニックの先生方の姿はとても印象深く、私の理想の医師像が一つ増えたと感じています。

透視下やエコーガイド下での神経ブロックの症例も多く、先生方の華麗な手技を拝見しながら、解剖の勉強もさせていただきました。普段からそうあるべきだとは思いますが、特にブロック注射では、基礎となる解剖学的知識を覚えておかなければならない事が多く、解剖の本が手放せませんでした。透視下ブロックで造影剤が広がっていくのを拝見してから、手術室で硬膜外カテーテルから局所麻酔薬を注入する際にも広がり方をイメージしながら麻酔管理をするようになりました。

お忙しい外来や病棟業務の合間を縫って、論文や最新の研究や治療についても講義していただき、いかに健康に過ごすか、いかに高い質の医療を受けるかということに関心が向いている現代の社会において、ペインクリニックの先生方がますます必要とされるであろうことを確信しました。

貴重な学びの機会を与えて頂き、感謝しています。最後になりましたが、渡邉先生、藤原先生、木本先生、岡本先生、ありがとうございました。

動物実験を経験して

奈良県立医科大学附属病院　医療技術センター　臨床工学技士
山中　浩太郎

奈良県立医科大学附属病院　医療技術センター　臨床工学技士の山中浩太郎です。ご縁があり麻酔科の修士課程の進学し修了しました。在学中に自分にいただいたテーマは「アミロダロンが脳細胞に与える影響の検討」とラットを使用しての研究です。

初めての動物実験、最初は不安もありましたが、実験の手順は挿管、動脈ライン、静脈ライン確保などと今まで臨床で見てきた事が実際に手技としてできる事に（ヒトとラットと大きく異なっていますが）喜びを感じながら、実験を開始しました。しかし、技術が安定するまで様々な失敗があり、人生初めての挿管は食道挿管･･･。暴れるラットと慌てる自分の気持ちを抑えながら、再度鎮静のためboxの中へ。また、ラインを取るのに気づけば3時間と目の前に見えている血管が確保できない事にイライラしながら、いつになったら実験のスタートラインにたどり着くことができるのかと思う日々を送っていました。

半年後には挿管、ライン取りはできるようになっていましたが、次の段階でまたトラブル発生などといろ

いろな事をしてきましたが現在はなんとか実験を終えて、学会発表の機会をいただきました。

動物実験期間1年半と短い間でしたが、普段臨床ではできないライン取りやラットとの格闘など貴重な経験をさせていただきました。皆さんも夢の国でマウスとラットと共に時間を忘れて実験してみませんか?

最後になりましたが、川口教授をはじめ、ご指導いただいた井上先生、内藤先生、無理言って実験の物品を注文していただいた秘書の太田さん、研究にご協力してくださった先生、CEの皆さんに深く感謝いたします。

挨拶

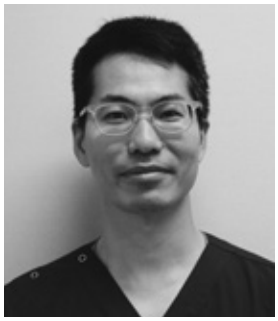
了戒　真義

初めまして。私は他院で初期研修を終え、2018年度より当大学麻酔科で勤務しております。当大学の麻酔科の魅力は症例数が大変豊富な点であり、新生児から超高齢者まで幅広く経験することができます。リスクの高い症例の麻酔を担当する機会も多く緊張する場面もありますが、上級医の先生方の丁寧な指導のもと毎日様々な経験をさせていただいています。手術室で働くスタッフの皆さんともコミュニケーションがとりやすく恵まれた環境であると思います。

勤務時間内はめまぐるしい時間もありますが、当番制になっているため仕事だけでなく自分の時間もしっかり持つことができます。

これからも日々の症例から勉強を絶やさず精進して参りたいと思います。興味のある方がいらっしゃればぜひ見学にお越しください。

石川　智喜

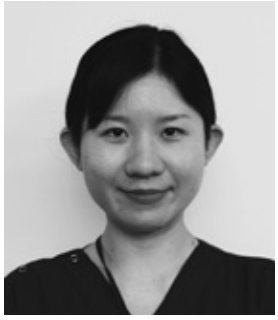


はじめまして、今年度入局の石川智喜と申します。富山大学卒業後、市立奈良病院での研修を経て入局致しました。元々は救急志望でしたが、市立奈良病院で呉原先生の卓越した手技に魅了され、またICUで後藤先生に麻酔科からの救急の道を提示いただき、麻酔科室では瓦口先生に温かく見守られ、麻酔科入局の運びとなりました。春に大学に来てからは環境の違いや症例のバリエーションの豊富さに戸惑いましたが、少しずつ慣れてきたところです。今後は市立奈良の三巨頭に少しでも追随すべく精進したいと思う次第ですので、ご指導、ご鞭撻宜しくお願い致します。

住田　真理子

初めまして。今年の4月から奈良医大麻酔科で研修をさせていただいている住田真理子です。奈良医大を卒業後、2年間西和医療センターで初期研修をしていました。西和医療センターはとてもアットホームな病院で、患者が救急外来に搬送されてきてから退院するまでをすべて主治医として担当することができ、臨床能力や担当医としての責任感など、医師として最も大切な基盤を培えました。今後はその基盤のうえに、麻酔科医としてのさらなる専門性と技術を養っていきたいと思っています。指導医の先生方の豊富な知識と質の高い周術期管理には日々感銘を受けていますが、なによりも未熟者の私に対して時間を割いて丁寧に指導してくださり感謝が絶えません。まだまだ至らぬ点ばかりですが、これからもご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

廣田　あずさ



今年度麻酔科に入局させていただきました廣田あずさと申します。

奈良県立医科大学を卒業し、同附属病院で2年間初期研修をしました。

初期研修で麻酔科をローテートさせていただき、循環呼吸をはじめとする全身管理や、血行動態のdynamicさ、手技の豊富さに魅了され、入局を決めました。

半年が経過しましたが、毎日様々な症例を経験し、とても充実した研修をさせていただいております。まだまだ未熟ですが、日々の症例を大切に学んでいきたいです。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

宮田　麻世

今年度から奈良医大麻酔科で研修をさせていただきます、後期研修医一年目の宮田麻世と申します。私は奈良県立医科大学を卒業し、附属病院で二年間初期研修を行いました。大学時代は軟式テニス部に所属していました。

後期研修が始まって半年が経つところですが、まだまだわからないことばかりで、文字通り右往左往する毎日を過ごしています。そんな中でも、なんとかやっていけているのは丁寧に熱心にご指導いただいております先生方のおかげです。至らぬ点ばかりだと思いますが、これからもご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。

VIVA！おひとり様 ー「Sri Lanka Curry in Osaka」

大阪鉄道病院麻酔科　**北川　和彦**

何時からでしょう、大阪でカレーがブームになったのは。今では、ブームではなく文化と言っていいくらい、多種多様なカレー店があります。子供のころからお馴染みの欧風カレーから、インド各地域のカレー、ネパール、パキスタン、タイなどの東南アジア系、創作スパイスカレーなど、そのジャンルはいろいろですが。なかでも、スリランカ・カレーが熱い。一つのプレートに主となるカレー、豆のカレー（ダール）、野菜のサラダ（サンボーラ）やスパイス炒め（アラ・バドゥマ）、ココナッツのふりかけ（ポル・サンボーラ）、豆せんべい（パパダン）などが盛られていて、色鮮やかで超ヘルシー。ベースの出汁はモルジブフィッシュっていう鰹節みたいなもので、馴染み深く。特筆すべきは、その食べ方。最初は、各々のカレー、副菜とバスマティライスを。次は、お好みで二三種類を混ぜ混ぜして組み合わせを楽しみつつ。最後はすべて、ぐちゃぐちゃ。これが、今まで体験したことの無いような、渾然一体と化した美味しさなのです。今回は、筆者のお気に入りのお店をご紹介。一度ハマったら、もう抜け出せないかも！

◎ロッダグループ
大阪市西区千代崎1-23-9　桜ビル2号1F
TEL　06-6582-7566

大阪にスリランカカレーブームをもたらせた有名店。アジスさんアヌラさん御兄弟を中心にスタッフ全員がスリランカ人。全く日本仕様にされていない、現地さながらのギャミラサが戴ける。飛び交うのは現地の言葉で全然分からないけど、時々「カレー美味しい？」って気さくに話しかけてくれる。お味は次のセイロンカリーに比べコッテリ濃い目。このあたりは、好みの分かれるところ。お昼時は並ぶのを覚悟でどうぞ。

◎セイロンカリー
大阪市中央区南船場1-13-4　フロントラインビル1F
TEL　06-4977-0636

ロッダグループと人気を二分するお店。オーナーの裕子さんとシェフのランジさんの黄金コンビ。厨房はスリランカスタッフによる現地の味と、フロアは日本人女性たちによるきめ細かなサービスが両立している。まずは、名物のアンブラをバスマティライスに変更で。食べたことのないのにどこか懐かしい、そんなカレーにスプーンが止まらない。ランチはアンブラ以外にも、フライドライスやビリヤニなど。夜は一品料理も多く、コースも有り小宴会も可能。忘年会にスリランカ料理なんて変化球はいかが？

◎ Anonymous
大阪市中央区東心斎橋1-17-15　丸清ビル5F
TEL　06-6245-5589

以前は遅くまでやっているロックを流すバーだったのですが、今はスリランカカレーを食べられる隠れ家。でも、バーです。店内は暗めの照明で、シックでお洒落。「スパイスの申し子」黒田健さんの絶品カレーを、ゆっくりお酒を傾けながら戴く幸せ。事前の予約とドリンクのオーダーは必須です。来店は二人までで。

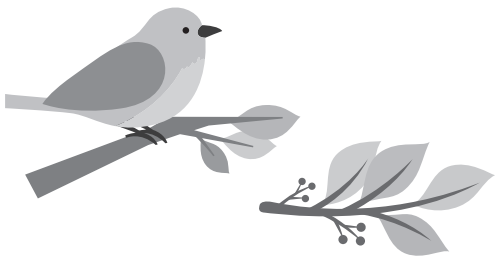
Anonymous のカレー。蓮の葉で包まれています。

◎ポンガラカレー
大阪市北区角田町8-47
TEL　06-4792-8229
　阪急うめだ本店の地下1階北側、阪急サン広場にあるカレー店。その立地の良さと通し営業から、とても行きやすい。今回ご紹介した中では、一番日本人向けにアレンジされている。普通のビーフカレーも有ります。上記、黒田さんのプロデュース。今年9月に赤坂アークヒルズと大手町プレイスに連続でオープン。東京にポンガラ旋風が吹き荒れるかも。

No 麺 s, No Life!

奈良県立医科大学　麻酔科　**新城　武明**

タンメン（湯麺）
　某漫才コンビのネタの「お前に食わせるタンメンはねえ！」に出てくるアレです。
　茹でた中華麺、そしてモヤシ、ニラ、ニンジン、キャベツ、キクラゲ、タマネギ、豚肉等を炒めたものに、塩味に調製した鶏がらを主とするスープを加えたものである。中華料理店やラーメン店で提供されることが多いが、野菜が入った塩ラーメンとは製法が異なる。単なる野菜ラーメンとも同義ではなく、一般にこれらとは異なる料理として分類される。北海道や西日本地域ではあまり知られておらず、中華料理店のメニューにもほとんど載っていない。発祥の地や歴史は諸説あるが、東京か横浜が発祥地とされている。最初に作られた時期も戦前からあるという説と、戦後になって横浜にある中華料理店「一品香」が最初に作った説もある。ワンタン麺（雲呑麺）はタンメンとは異なる麺料理である。また中国における湯麺（たんめん）（スープ麺）は、現地では麺の字が粉食全般を指すことから、麺（麺条＝細い麺の状態になったもの）料理のうちスープ麺（汁麺）であることを表す。・・・以上wikipediaより。
　ラーメンと違う所は、先にスープと具を一緒に炒めてから麺と混ぜて盛り付ける点なようです。（ラーメンなら具は最後）



今月の一杯
湯麺専門店　満菜　加賀屋店
場所：大阪府　住之江区
麺：平打ち麺
種類：ラーメン・つけ麺もあり
スープ：豚骨・鳥ガラ
サイドメニュー：餃子、ご飯、チャーハンなど

　関西でタンメン専門を掲げる店はほぼないのではないでしょうか。もっとも、専門をうたっていながらラーメン・つけ麺があったりしますが。具の野菜は炒められているため、油の味が全面に出ます。ラードでしょう。豚骨ベース塩味、パンチに胡椒がよく効いております。具はキャベツ・豚肉・キクラゲ・にんじん・イカといったところで、野菜たっぷりのラーメンという印象です。
　「ちゃんぽん」との違いはなんでしょうね。ちゃんぽんならば関西にも数多くありますが・・・。

編集後記

　ようやく涼しくなってきた今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか？
　今年は稀に見る、台風に泣かされた年でしたね。さて、先日の関空に大被害をもたらした台風21号（アジア名：Jebi）ですが、最大瞬間風速および最大潮位で観測記録を更新したそうです。あの被害も宜なるかな。
　昼夜で温度差が大きく服装に悩む時期ですね。皆様何卒ご自愛ください。